長唄　元禄花見踊

明治十一年（1878年）六月

作詞　竹柴 瓢助

作曲　三代目 杵屋正治郎

【二上り】

吾妻路を　都の春に志賀山の、

花見小袖の縫箔も　華美をかまわぬ伊達染や、

斧琴菊の判じ物、思ひ〳〵の出立榮

〽連れて着つれて行く袖も　だんだ振れ〳〵六尺袖の、

しかも鹿の子の岡崎女郎衆　裾に八つ橋 染めても見たが、

ヤンレほんぼにさうかいな　そさま 紫　色も濃い、

ヤンレそんれは　さうじゃいな

手先き揃えて　ざざんざの、音は濱松　よんやさ

〽花と月とは、どれが都の眺めやら

かつぎ眼深に北嵯峨御室、二条通りの百足屋が、

辛氣こらした真紅の紐を、袖へ通して　繋げや 櫻

疋田鹿の子の小袖幕

目にも綾ある小袖の主の、顔を見たならなほよかろ、

ヤンレそんれはへ

〽花見するとて熊谷笠よ

飲むも熊谷 武蔵野でござれ 月に兎は和田酒盛りの

黒い 盃 闇でも嬉し　腰に瓢 箪 毛巾 着、

酔うて踊るが

よい〳〵〳〵よいやさ

〽武蔵名物　月のよい晩は　をかだ鉢巻き 蝙蝠羽織

無反 角鍔 角内連れて　と、は手細に伏編笠で、

踊れ〳〵や

布搗く杵も、小町踊りの伊達道具、

よいよい〳〵〳〵よいやさ、面白や

入り来る〳〵桜 時、永當東叡 人の山、

彌が上野の花 盛、皆 清水の新舞臺

賑はしかりける次第なり